

子どもの世界



牛 島 義 友

この頃の子どもはチャンバラの代りに二挺拳銃をあやつり、童謡を忘れてコマ・シヤル・ソングを口ずさんでいる。子どもの世界はおそろしく変わったものである。

以前は子どもの世界といえば小川でさき舟を浮かべたり、わらべ歌を歌いながらまりつきをし、いろりの傍でおじいさんからかちかち山の話を探り返して聞かされていた。ここには超時代的な昔ながらの自然性があり、民族の伝統を身をもって受け継いでいた。ここでは子どもも父親も祖父も曾祖父も同じ生活をし、同じ共感の経験を味わっていた。この環境で育つ限り、子どもは祖先と同じような日本人となって

いった。このように伝統文化が語り伝えられるには子ども達が忙がしい親からではなく、比較的ひまな祖父母達から育てられたということも関係しているかもしれない。昔話にでてくるのはたいがい、善いおじいさんとか、よくばりばあさんといった具合に、じいさんばあさん達であるのもこのことの反映であろう。

この状態に近代的な文化伝達法であるマス・コミが現われてから様子が変わってきた。すなわち印刷やレコードが発達してくると、昔話に代って世界おとぎ話や創作童話が生まれ、童歌の代りに童謡が歌われるようになった。この段階におけ

るマス・コミの功績は非常に大きい。子どもの知識は狭い郷土の伝説からクリムヤアラビアンナイトのような、世界的空想の世界に広げられた。また多くの作家達は子どもの童心を愛し、子どものために気品のある作品を書いてくれた。赤い鳥を中心として楽しい子どもの世界がくりひろげられた。日本の児童文化史上において大正から昭和の初めほど栄えた時はなからう。

ところが今日はテレビの時代である。ラジオの普及した頃には、まだ童話・童謡はおとろえず、否ラジオを媒介として童謡は一層盛んになった。ところがテレビの時代になるや、童謡は忘れられたというよりも、テレビっ子達は童謡を聞かしてもらえず、もっぱらコマ・シャル・ソングで育てられてきた。テレビの視覚的刺激は強烈であるため、子どものいっさいの興味とエネルギーを吸い取ってしまった。テレビの普及につれ読書の傾向がへってきたといわれるが、これはおとなの世界だけでなく、子どもでも絵本や童謡の本を読むよりもテレビの方に吸われてしまう。聴覚的刺激（書物も本来聴覚的な系統のものである。）では、観念的要素が多く、非現実的な空想的な世界をかもし出すことが多く、したがって夢の世

界、童話の世界を作るのに適している。しかし視覚的刺激は、現実感が強く子どもの中に創作活動をひき起すよりも、対象にとらわれ、テレビの場面をただ模倣し、それに左右される傾向となる。テレビばかり見ていれば二挺拳銃で活躍したくなるのは当たり前である。今日は子ども達は強烈なテレビの力によって、ほんろうされじゅうりんされている。

この近代の技術であるテレビなどのマス・コミを非難したところでどうにもならず、ただその頑固さが笑われるだけである。しかし、この近代化現象をただそのまま認容していいよいものであろうか。

たしかに日本がこのように近代的なものを、無制限に吸収できることは、日本的な性格であり日本の強さではある。東南アジアの諸国は今、その後進性をとりもどして近代化しようとしていっている。しかし彼らのメンタリティーには外来のもの拒否する頑強な保守性がある。タイやインドの小学校を參觀すると、算数や理科には近代科学を吸収しようと努力しているが、唱歌の時間には固有の民族の音楽を教えている。タイの旋律はオルガンなどにのらないので、音楽の先生はものさしのような竹棒で机をたたいて拍子だけをとりなが

ら、口伝えに教えていた。インドではベンガルの音楽が伝統的なやり方で教えられる。ここでは鼓を手早くはじいて拍子をとるが、これはもっぱら男の樂士が受け持つ。女ばかりの女学校でも音楽の先生だけには男性が混っている。この民族固有の旋律に親しんでいる限り、西洋音階に親しむことは困難であろう。わが国が明治のはじめから、西洋音階を取り入れ、今日の日本の音楽とは決して古来の日本音楽ではなく、西欧の音楽と同一系統のものになってしまったことと較べてみたら、非常な相異である。あるいはインドでは映画が愛好され、その製作数は世界の首位を争うといわれているが、輸入映画でなく、自分達で製作する限り、この近代のマス・コミ技術も彼らの伝統的文化の伝達、普及以上に出ないであろう。

ゆえにわれわれは日本において近代技術が無制限に取り入れられ、その結果子どもの世界や人間像が著しく変形してきたからといって、なげいてはいけない。しかし近代性とは科学的合理的であるということである。しかしわれわれの今日の姿は科学的合理的といえるであろうか。コマ・シャル・ソングは誰にでも、子どもにすら分りやすいリズムとメロディ

を持って、強烈に商品を聴視者の耳に焼きつけようとして作られたものである。この点に関する限り、合理的でありまた成功している。しかしそれはあくまで商品の宣伝として合理的なのであって、子どもの心を豊かにし彼を健全に育てるために工夫され創作されたものではない。したがって子どもの教育の点からみれば、計画性のない、合理性のないものである。児童文化の世界に科学性ということばを使うのはおかしなわけであるけれど、子どもの創作性、個性を育て良い人間形成をもたらす教育の方法としては、計画性が必要となり、合理性が大切であろう。ところが今子どもに与えられている文化財には、何らの計画性がなく、完全にコマ・シャル・ソムの前に放任されているといわねばならない。このような無計画性を許して、近代的生活者と言えるであろうか。

今日の日本人は子どもの出産に関してだけはどの国よりも計画的である。昔の親達に較べれば半数以下の子ども達しか育てようとしないため、子どもを育てる精神的、時間的余裕がはるかに多くなっているはずである。それなのにこのような放任が続けられている。

また今日の住宅には子どものための配慮がなされない。二

間くらいのアパートで、自由な子ども達の生活ができるはずがない。しかも三階・四階にいたのでは危険でしかたがない。建築の高層化を計るなら、当然子ども遊び場だけでなく、子ども達を安全に守る設備が計画されねばならない。香港は狭い土地に人口の密集した大都会である。七階・八階のアパートがずらりと並んでいる。このアパートの一階にはたいがい幼稚園が作られている。しかも私立の幼稚園・保育所である。彼らは自分達の手で子ども遊び場と教育の場を解決している。

またかつては住宅の周りの路は子どもの安全な遊び場所であった。自転車で遠出をしない限り交通事故などはなかった。しかし今日ではこの静かな住宅街にも自動車が疾走し、もはや子ども達の遊びの場所とならなくなった。急ぎの用をたすには、高速な自動車は合理的である。しかし静かな生活を維持する（しかもこれは多忙な近代生活ではますます必要なものとなつてきている）ためには住宅街の中に自動車が侵入することとは合理的でない。学園の中には自動車の侵入が禁止されているが、われわれの住宅地にもこのような措置が必要である。日本人はこういう場合にすぐ金が無いという。しかし洗

濯機やテレビの普及はドイツやフランスあたりより進んでいるし、自家用車もそのうちに西欧なみに普及するかもしれない。よくいわれるように、食と衣は戦前のレベル以上になった。しかし日本の住生活はなんとみじめなことであろうか。

これは日本人の金の使い方が住に対して無関心あるいはケチなためではなからうか。不当に安い家賃しか払わないので借家をたてる人がいなくなったわけであるし、イギリスのように学校や公共施設を後まわしにしても住宅を第一にするような、私生活を尊重する伝統がないために、このような姿となるのではないだろうか。われわれは子どもを育てる世界をもっと合理的に計画していくべきではなからうか。テレビなどの高度の近代技術は用い方によればいくらでもよい教育手段となりうるものである。おもしろくてためになるというのがコマージュリズムのうたい文句のはずである。おもしろいけれどもためにならないものを、おもしろくてためになるものに変えさえすれば、一層高い聴視率が得られるはずである。われわれの子どものためになるように、子どもの生活環境を近代化したいものである。

× × × ×